

ライティング力向上のための品詞認識の 重要性とその方法論

—— TOEIC L&Rを使った取り組み ——

Scaffolding English Writing Skills
by Enhancing Recognition of Parts of Speech

—— Using Drills from TOEIC L&R ——

山科 美智子

YAMASHINA Michiko

ライティング力向上のための品詞認識の 重要性とその方法論

—— TOEIC L&Rを使った取り組み ——

Scaffolding English Writing Skills by Enhancing Recognition of Parts of Speech

—— Using Drills from TOEIC L&R ——

山科 美智子

YAMASHINA Michiko

Abstract : This study investigates how beginner and intermediate learners in a college environment improve their writing skills by increasing morphosyntactic knowledge of derivational English words. Learners tend to confuse parts of speech, which deteriorates their writing quality and grammatical construction. In this study, learners were assigned two types of time-limited tasks. In the first, they completed 60 exercises to differentiate parts of speech of English words by recognizing their suffixes; results indicated that nonneutral suffixes were more difficult for them to recognize than neutral suffixes. In the second exercise, learners were asked to choose an appropriate word among different parts of speech to complete 130 sentences. Both before and after the experimental interventions learners were asked to write paragraphs similar in subject matter. A comparison of the paragraphs for each learner revealed that, for a majority of learners, their recognition of derivational English words increased, which improved their writing quality.

Keywords : writing, part of speech, suffixes, TOEIC L&R

1. はじめに

英語4技能の中で、発信するための技能である、スピーキングとライティングに苦手意識のある英語学習者は多い。2016年のTOEFL iBTのTEST and Score Data(ETS)¹を見ても、日本の平均点は、30点満点中、スピーキングが17点、ライティングが19点と、世界の平均点、スピーキング19.9、ライティング 20.7に及ばない。TOEFL iBTは、留学希望者や、英語学習者の中でも中級から上級レベルの学習者が多く受験することを考慮に入れると、日本全体の英語学習者におけるスピーキングとライティングのスキル、つまり発信する技能のレベルは世界全体から見ても平均よりだいぶ低いランクに位置すると考えられる。特に初級から中級の学習者にとって、スピーキングとライティングは、負荷が高い。自分で単語を選び、英語文法に則ってセンテンスを組み立てるというタスクが必要とされるからである。特にライティングは、学習者が組み立てたセンテンスが目に見える形で示されるため、学習者の文法運用能力とその問題点が明白に表れる。

昨今、短大や大学で、初級、中級者（TOEIC 500点未満の学習者）にライティングを指導していると、単語の品詞認識ができていない学習者が多いことを痛感する。品詞がわからないと、文法に則って正しい順序で単語を並べていくことができない。5文型などの文法の基礎を学んでもそれをライティングに活かすことができないのである。学習者の中には、そもそも品詞認識がなぜ必要なのか理解できていない場合も多い。この論文では、初級から中級の学習者のライティングに見られる品詞認識の弱点を探り、その弱点を克服するための方法と効果を考察していく。

2. 背景

2.1 初級、中級学習者のライティングに現れる品詞認識の欠如

品詞は、中高の英語授業で必ず習得しているはずの文法事項であるが、実際には大学生でも、形容詞と副詞の違いがわからない、名詞と形容詞の区別ができない、などの問題点を抱えている学生が多い。品詞の種類を書かせると、形容動詞も英語の品詞として記入する学生もいて、日本語の品詞と英語の品詞の混同も見られる。

以下は、大学2年生の必修英語のクラスで、ライティングタスクを課した時に学生が書いたセンテンスを抜粋したものである。様々なミスが文中にあるが、ここでは品詞を間違えて使ってい

る箇所だけにフォーカスして下線で示した。タスクの概要は、「企業がイメージ戦略として使っている色とロゴ」について5～6行で述べるというもので、学生は自分の興味がある企業を一つ選び、そのロゴと色に関して記述した。このタスクを行う際、辞書を使っていいことになっていた。

表1 学生が書いた英文とミスの種類

No.	学生が書いたセンテンス	ミスの種類
1	I think the company want to show their <u>peaceful</u> , <u>cheerful</u> , and <u>friendly</u> by these colors.	名詞と形容詞の混同 (SVO)
2	In addition, brown and white show <u>safe</u> , <u>reliable</u> , and <u>clean</u> .	名詞と形容詞の混同 (SVO)
3	Generally, black stands for <u>bold</u> , <u>serious</u> , and <u>luxurious</u> .	名詞と形容詞の混同 (SVO)
4	The orange color also has a meaning of <u>friendly</u> and <u>healthy</u> .	名詞と形容詞の混同 (meaning of 名詞)
5	My impression of the company is it is cheerful and <u>friendship</u> .	形容詞と名詞の混同 (SVC)
6	Red and yellow show us <u>bright</u> and warmth.	名詞と形容詞の混同 (SVO)
7	The company wants to appeal the <u>luxurious</u> and <u>clean</u> .	名詞と形容詞の混同 (SVO)
8	The company wanted to use green color because it shows <u>dependable</u> , <u>peaceful</u> , vitality and security.	名詞と形容詞の混同 (SVO)
9	White means cleanliness, <u>good</u> , beauty, and <u>pure</u> .	名詞と形容詞の混同 (SVO)
10	They chose this logo <u>careful</u> .	副詞と形容詞の混同 (SVO)
11	The logo looks like a child walking <u>cheerful</u> .	副詞と形容詞の混同 (SVO)
12	The logo should impress customers <u>strong</u> .	副詞と形容詞の混同 (SVO)

この表の1～9は、形容詞と名詞を混同して使っている例である。例えば、1のセンテンスでは、peaceful, cheerful, and friendlyの部分は、動詞showの目的語となるため、名詞を入れて、peace(peacefulness), cheerfulness, and friendlinessとならなければいけない。あるいは、後ろに名詞を加えて、peaceful, cheerful and friendly atmosphereのように、showの目的語である名

詞を形容詞が修飾している形にしなければいけない。しかし、この学生は、形容詞と名詞の区別がついておらず、名詞を入れるべき場所に形容詞を使ってしまっている。逆に5のセンテンスでは、SVCの構文で、補語の部分が形容詞、cheerful and friendlyにならなければいけないが、friendlyの部分を名詞にしてしまっている。6、8、9のセンテンスでも、本当は動詞の目的語として名詞が並ぶはずであるが、名詞と形容詞を混在させて、並べてしまっている。以上の例を見ると、名詞と形容詞の形が区別できていないために、混同して使っていることと、SVOのOの部分に名詞が入るという認識ができていないこと、そして、SVCのCの部分に名詞が入る場合と形容詞が入る場合の認識が不足していることがわかる。

加えて、10、11、12のセンテンスは、副詞と形容詞が混同して使われている。例えば、10のセンテンスでは、They chose this logo carefully. となるべきで、副詞のcarefullyが動詞choseを修飾するのだが、副詞の部分に形容詞を入れてしまっている。このように、副詞と形容詞を混同する学生も多い。

Bauer, L(2001) は *Morphological productivity*²の中で、英語学習者が使う語彙に関してこう述べている。

Language learners are sensitive to distributional probabilities of language input to which they are exposed. It has long been noted that word frequency affects the processing and storage of lexical items.

学生は、いつも自分が聞き慣れている、あるいは見慣れている品詞の形をスタンダードとして覚えていて、その単語の品詞を変えて使わなければいけない場合でも、自分にとってのスタンダード形をそのまま使ってしまう場合が多い。例えば、safeをよく使うなじみの単語として覚えていると、safeが形容詞であるという認識なしに、名詞を入れるべき場所にもsafeのまま使ってしまい、safetyという派生語が使えないのである。

この表1の1～12のミスを含んだ英文をそのまま学生に示し、間違いを見つけて訂正するように指示したところ、すべての間違いが訂正できた学生は28人中0人で、75%以上の学生は、どこを直せばいいかわからない、あるいは、直してみたけれど、訂正した箇所が正しいか自信がない、と返答した。間違えていない部分を訂正してしまった学生もいた。辞書を使っても正しい品詞が入れられない、あるいは間違いを訂正できない、ということは、根本的に品詞と文型の関係の理解ができていないと考察することができる。

以上のライティングタスクの分析により明らかになった、学習者の品詞認識と文型認識の欠如に対する対策として、単語の品詞を素早く理解するスキルと、文構造を理解して正しい場所に正しい品詞を入れるスキルを向上させる必要があると判断した。

2.2 TOEIC L&Rテスト パート5 品詞問題の活用

アメリカのテスト作成機関であるETSが作成しているTOEIC Listening & Readingテストは今や、企業、大学、そして様々な教育機関において英語力を測る手段として採用されている。TOEIC L&Rテストのスコアを英語のクラス分けの際に参考にしたり、あるいは、スコアを上げるための対策講座が必修となっている大学も多い。TOEIC L&Rテストは、7つのパートに分かれているが、その中のパート5は短文穴埋め問題となっており、文法や語彙の知識を問う問題が30問出題される。その中の3割から4割を占めるのは品詞の問題である。選択肢4つの中から、正しい品詞をセンテンスに入れることが求められる。TOEIC L&Rテストは、リスニングが100問、リーディングが100問あるが、リーディング100問は、75分で解かなければいけないため、パート6の長文穴埋め、パート7の長文読解に時間がとられることを考慮に入れると、パート5は、30問を10分で解くのが理想とされる。つまり、1問20秒のスピードで解いていかなければいけないために、品詞問題においては、4つの選択肢の単語の品詞を瞬時に判別するスキルと、空欄に挿入すべき品詞の瞬時の判断が必要になる。この品詞問題対策を応用して、品詞認識と理解を高め、結果的に表1のようなライティングでのミスをなくしてライティングのクオリティを高めていくことを目標とする。

3. 品詞認識向上のための対策実施概要

3.1 対象者

英語必修の授業を受講する関東在住の女子大学生28人。

3.2 調査時期

2017年11月から2017年12月にかけて、授業内で後述の教材を使用したドリルを行い、その効果をライティングタスクによって検証した。

3.3 教材

品詞の基礎から、きめの細かいステップを踏んで、応用問題まで導くことができるドリルとして、「TOEIC® L&Rテスト 英文法 ゼロからスコアが稼げるドリル」³高橋恭子著 株式会社アルクを使用した。

この教材は、品詞のドリルに48ページを割いており、英語文型の解説とともに、文に欠けている品詞を見極めて空所に選択肢より正しい品詞を挿入していくドリル210題で構成されている。例えば、一般動詞の前、現在完了の文の間、冠詞・代名詞と前置詞の間など、単語が入る位置によって入れるべき品詞が異なるが、そのパターンが細かく示されており、それぞれのパターンを学習した後、全種類のパターンが混じったチャレンジ問題で実力を試すことができるよう構成されている。

3.4 教材の使用方法与効果の検証

最初に20問の品詞問題を3分間で解き、正解率を出す。これが初期値となる。次いで、パターン別のドリル問題を130題解き、その後、すべてのパターンを混ぜた品詞問題を20問3分で解き、初期値と比較する。最後にライティング課題5～6行の中に品詞の間違いないか検証する。

4. 結果及び考察

4.1 接尾辞による品詞の見分けドリルの効果とNonneutral suffixesの習得率

名詞、動詞、形容詞、副詞の接尾辞に関して解説した後、品詞当てクイズ20問×3セットを行う。各セットの終了時には、ペアを組んで、ひとりが単語を読み、ひとりがその単語の品詞を答えるというペアワークを5分間行い、接尾辞の音による品詞認識の定着も図った。

単語の接尾辞には2つの種類がある。ひとつは“neutral suffixes”で、接尾辞が-ment, -ful, -nessなどで、語幹に変化を加えることなしに接尾辞を付けることができ、ストレスの位置も変わらない。例えば、dévelop + ment = développement, úse + ful = úseful, sérious + ness = sériousnessなどである。一方“nonneutral suffixes”は、接尾辞が-tion, -ity, -icなどで、接尾辞を付ける際に、語幹を変化させなければいけないと同時に、ストレスの位置も変化する場合が多い。例えば、distríbute + tion = distribútion, respónsible + ity = responsibíility, ecónomy + ic = económíicなどである。一般的に、neutral suffixesの習得は容易であるが、nonneutral suffixesの習得には

より困難が伴う。単語のどの部分が語幹で、どれが接尾辞なのかわからない、あるいは、音を聞いたときに、アクセントの位置が変わってしまうために、派生語だと気付けない、といった問題が起こってくる。

ドリルを行った後で、5つのneutral suffixes(-able, -ful, -ment, -ness, -ship)と5つのnonneutral suffixes(-ance, -ic, -ity, -tion, -ous)の正解率を比べた。

表2 Neutral suffixesとNonneutral suffixesの品詞区別の正解率

Neutral suffixes(-able, -ful, -ment, -ness, -ship)	Nonneutral suffixes(-ance, -ic, -ity, -tion, -ous)
profitable, remarkable, successful, useful, equipment, agreement, happiness, seriousness, friendship, partnership	significance, ignorance, metallic, realistic, responsibility, opportunity, application, position, continuous, various
92%	81%

以上の結果から、nonneutral suffixesの習得率は、neutral suffixesの習得率より低くなっていることがわかる。接尾辞を教える際には、Nonneutral suffixesが語尾に付く場合の語幹変化やアクセントの位置の変化に学習者の注意を向けていかなければいけない。

4.2 文構造と品詞にフォーカスしたパターン認識の効果

接尾辞による品詞認識のドリルの次は、センテンス内の空欄に挿入する適切な品詞を選ぶドリルを行った。前述の教材では、空欄の位置により、13のパターンに分類され、それぞれのパターンごとに10問のドリル問題を解いて、パターンを定着できるようになっている。最終的には、すべてのパターンがランダムに出題される復習問題に挑戦し、実力を確認できるように構成されている。この、すべてのパターンをランダムに混ぜた問題20問をドリル前とドリル後に行うことによって、正解率を比較し、ドリルの効果を検証した。以下の表は、13のパターンとその例文である。

表3 文構造と挿入される品詞のパターン

No.	文構造における空欄の位置	品詞	例文（下線が空欄の位置）
1	主語がない	名詞	Our <u>business</u> is successful.
2	補語がない(1)	名詞	This is a <u>demonstration</u> .
3	補語がない(2)	形容詞	She is <u>beautiful</u> .
4	目的語がない	名詞	He sent an <u>invitation</u> .
5	名詞の前が空いている	形容詞	This is a <u>confidential</u> document.
6	形容詞の前が空いている	副詞	These are <u>really</u> expensive items.
7	一般動詞の前が空いている	名詞	We <u>easily</u> passed the test.
8	文の最後が空いている	副詞	He works <u>efficiently</u> .
9	進行形の間が空いている	副詞	The weather is <u>gradually</u> getting better.
10	受動態の間が空いている	副詞	The tickets are <u>nearly</u> sold out.
11	現在完了の文の間が空いている	副詞	Our profits have <u>dramatically</u> increased.
12	文頭のカンマの前が空いている	副詞	<u>Finally</u> , she passed the test.
13	冠詞・代名詞と前置詞の間が空いている	名詞	This is an <u>advertisement</u> for our new product.

ドリル開始前の平均正解数は20問中11問で正解率55%であったが、ドリル後は、20問中18問で90%に伸びている。文章のどの位置に何の品詞を入れるべきか、パターンに分けて定着させていく教授法と、パターンごとのドリルを繰り返すことの有効性がこの数字から検証できる。

4.3 ライティングタスクにおける品詞認識と文構造のパターン認識ドリルの有効性

以上、接尾辞による品詞の見分けと文構造と品詞の関係のドリルを終了した後、ライティングのタスクを課した。長さは、初回と同じ5～6行、テーマは、「自分が起業したい会社のイメージ戦略として使いたい色とロゴ」についてである。初回のライティングのテーマは、「企業がイメージ戦略として使っている色とロゴ」についてで、学生は自分の興味のある企業一社を選んでそのイメージカラーとロゴについて記述したが、今度は自分の会社を立ち上げるとして、そのイメージカラーとロゴに関して記述をする。テーマに関連性があり、かつイメージカラーとロゴに関して記述する上で、形容詞や名詞を多用する必要があるため、ライティングの中で、品詞が正しく使われているかが比較しやすい。ここでは、表1のミスのある文章を書いた学生がドリル後にどのような文章を書いたか、実際のセンテンスを記述する。ここでも様々なミスは見られるが、品詞の使い方フォーカスして、正しく使われている品詞に下線 を引き、間違っている品詞には波線~~~~~を引いた。

表4 ドリル後に学生が書いた英文

No.	ドリル後に学生が書いたセンテンス	文型パターン別 改善された点と非改善点
1	I want to express the <u>safety</u> and I want people to feel a <u>sense</u> of <u>closeness</u> .	目的語に名詞 (パターン4) the 名詞of 名詞 (パターン13)
2	I chose blue and white for the logo of my company because both colors express the <u>cleanness</u> .	目的語に名詞 (パターン4)
3	It has the <u>images</u> of pain and <u>fears</u> .	the 名詞of 名詞 (パターン13)
4	We can make customers <u>happy</u> .	SVOCのCは形容詞
5	This is the reason why people imagine that pink and blue are the <u>colors</u> of <u>harmony</u> .	the 名詞of 名詞 (パターン13)
6	Our company concept is <u>safety</u> and <u>comfort</u> .	SVC(パターン2)
7	Green color expresses <u>nature</u> and <u>peace</u> .	目的語に名詞 (パターン4)
8	In fact, girls and boys like <u>fashionable</u> things.	形容詞+名詞 (パターン5)
9	The reason why I put a girl on the elephant in my logo is that I want to describe <u>safety</u> .	目的語に名詞 (パターン4)
10 ×	Orange expresses <u>cheerful</u> and <u>happy</u> .	目的語なのに形容詞を入れている (パターン4)
11 ×	The initial "U" imitates smiley face hoping students always be <u>happily</u> .	SVCのCを副詞にしている (パターン3)
12 ×	The colors red expresses the <u>powerfully</u> and <u>aggressively</u> feeling.	名詞の前なのに副詞を使っている (パターン5)

No.10からNo.12はドリル後も品詞の間違いが文中に見られる例であるため、100%改善されたわけではないが、それでも、No. 1～9に見られるように、ライティング中に品詞を正しく使うことができる割合が大きくなっている。また、No.10～12に関しても、訂正が必要であることを指摘すると、すぐ直すことができた点では、以前よりだいぶ品詞認識の進歩が見られる。ここでは、28人中12人のライティングを抜粋して例として示したが、全体的に品詞のミスが大幅に減り、文構造を意識したわかりやすい英文が書けるようになっていた。

学生のアンケートを見ても、「ずっとわからないままだった品詞がわかるようになって、自信をもって英文を書けるようになった」という感想や、「今まであまり意識しなかった品詞の種類が文法に則った文章を書くうえで大切だということがわかった」という意見が聞かれた。今まで学習者が意識せずないがしろにしてきた基礎の部分を、細かいステップで積み上げていけるように構成されたドリルを繰り返すことで、克服できた様子が観察された。また、「TOEIC L&Rのパート5はずっと苦手だったが、品詞の問題の解き方がわかって楽しくなった」という感想も

あった。ライティングとTOEIC L&Rの両方のスキル向上に役立っていることがわかる。

5. おわりに

英語文法を理解する際に、品詞の区別は非常に大切な要素であるが、テキストや文法書においても、品詞に関する解説部分は短く、ドリルやExerciseを多く取り入れ品詞知識の定着を図ろうとする教材は少ない。そのような中で、学習者の理解はあいまいなままで、ライティングにおいても、品詞の違いを意識せずただ感覚的に単語を並べている学習者も多い。そのため、ライティングにおいて、適切ではない品詞を入れてしまう間違いに気付かず、文法理解にも支障が及んでいる場合が多い。

今回の研究では、接尾辞による品詞の見分けドリルと、文中の空欄に適切な品詞を選んで挿入するドリルを制限時間内に解く練習を繰り返しながら、品詞理解の定着を図った。ペアで問題を出し合いながら音からも脳にインプットする練習も繰り返した。

接尾辞による品詞の見分けでは、語幹とアクセントが変わらず接尾辞を付けるだけで品詞が変えられるNeutral suffixesの習得率は高かったが、語幹とアクセントが変化するNonneutral suffixesの習得率は比較的低かった。語幹と接尾辞をどうつなげばいいのか、そしてアクセントがどう変わるのか戸惑う学習者も多いため、例を示しながら変化のパターンを解説する必要がある。最終的に、英文ライティングによって、品詞理解の定着度を測った。ドリル前にミスをした品詞事項は、大部分の学習者がミスなく正確な文章を書けるようになった結果から、この文構造と品詞の関係をパターン化したドリルの効果が実証された。

大学の英語学習者に対して、品詞の区別のような英文法の基礎事項は、すでに習得されているべき事項として指導にはあまり時間を割かない場合が多いが、特に初級、中級者にとってはこうした基礎事項でのつまずきが、英語理解を妨げ、ライティング力を低下させている場合が多い。細かいステップを踏んで、ターゲットを絞ったタスクを行っていくことで、学習者のつまずきの原因を取り除くことが、文法力強化とライティング力向上の鍵を握る。

注

1. TOEFL iBT Tests Test and Score Data January 2016 – December 2016 Test Data
https://www.ets.org/s/toefl/pdf/94227_unlweb.pdf
2. Bauer, L. *Morphological productivity*, Cambridge, Cambridge University Press, 2001.
3. 高橋恭子 『TOEIC® L&Rテスト 英文法 ゼロからスコアが稼げるドリル』株式会社アルク, 2017

参考文献

- Keiichi ISHIKAWA (2016) Phonological and Morphosyntactic Knowledge of Derived English Words by Native Speakers and Japanese Learners of English, *JACET Journal*, 60, 21-35.
- Keiichi ISHIKAWA (2008) Japanese English Language Learners' Phonological Knowledge of Derived English Words, *JACET Journal*, 52, 19-29.
- 西垣知佳子, 中條清美, 木島綾子 (2010) 「パラレルコーパスを利用した英語上級者用データ駆動型英語学習の実践の試み」 千葉大学教育学部研究紀要 58, 279-286.
- 高橋勝忠, 海見沙織 (2014) 「接尾辞-ableの考察－認知メカニズムの観点から」 英語英米文学論輯：京都女子大学大学院文学研究科研究紀要13, 57-66.
- Jarmulowicz, L.D. (2002) English derivational suffix frequency and children's stress judgements, *Brain and Language*, 81, 192-204.

